

「総合演習」および「教職概論」の 授業公開に関する報告と考察

手 嶋 將 博

(教育学部准教授・教育研究所研究部主任)

はじめに

2008（平成 20）年 12 月 4 日（木）、文教大学教育研究所 FD 研究の一環として、筆者は 4 限目の「総合演習」および 5 限目の「教職概論」の授業公開を行った。これらの 2 つの科目を選んだのは、第 1 に、それぞれが大学の授業の中で大きな比重を占める「演習」と「講義」という異なる形式の授業形態を持つ科目であるため、第 2 に、「総合演習」は 30 名前後の小規模クラスの科目であるのに対し、「教職概論」は、毎年 100～150 名前後の学生が履修する大規模クラスの科目、という対比を念頭においたためである。本稿ではまず、各科目に関して、科目全体のねらいやシラバス等の概要、公開した授業の内容とその時間のねらい、参観のポイント、授業に関する自評等を述べていく。そして最後に、全体のまとめとして、FD の一環としての授業公開に関する私見を述べることとする。

I 「総合演習」

1. 授業の概要

科目名：総合演習（秋学期・木曜・4 限）

公開日時：2008（平成 20）年 12 月 4 日（木）

教室：13402

対象学生：教育学部 3 年生（34 名）

2. 本科目のねらいおよびシラバス

「総合演習」は教育学部教職科目に属する演習科目である。1997（平成 10）年の「教育職員免許法の一部を改正する法律」および「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令」の施行に伴い、新たに大学の教職課程に導入された科目である。

この科目は、「人間尊重・人権尊重に基づき、地球環境、多文化共生や国際理解等人類共通の課題、少子高齢化と福祉、学校や地域、家庭のあり方等我が国の社会全体に関わる課題について、受講者各自が理解を深めその視野を広げることを目標としている。具体的には、受講者が、体験的・問題解決的な学習、ディベート、パネルディ

スカッション等、さまざまな方法及び技術を用いて、自ら問題点を見出し、情報を集めて調査・研究を行い、それらを分析・検討して、主体的に課題に取り組む姿勢や、深い洞察力・思考力・分析力、さらには自己のあり方・生き方を考えられる力を身につけることが到達目標である。

本科目のシラバスは、およそ以下のようになっている。

- I. 総合演習ガイダンスー総合演習の意味と目標／授業概要・方法の解説／発表班分け・発表日程決定（1／15回）
- II. 学習課題の設定(1)ー課題の設定・研究方法に関する話し合い（I）・キーワード、関連事項の抽出・提示・序列化（2／15回）
- III. 学習課題の設定(2)ー課題の設定・研究方法に関する話し合い（II）・担当教員によるヒアリング・関連事項の検討・整理と研究内容の焦点化（2／15回）
- IV. 課題の研究ー情報収集(各班、課題の内容に合わせて方法を工夫する)／調査・研究／実験・観察／分析・結論付け／発表内容およびプレゼンテーション方法の検討／発表資料の作成／プレ発表…各班の研究概要の中間報告（2／15回）
- V. 課題のまとめー発表(各担当班による発表)/ディスカッション(全体討論)／相互評価(発表班に対しての教員および聞き手の学生たちによる評価。評価用紙に評価および意見等記入後回収し、各評価項目の数値は教員が集計、記述意見部分は各発表班がまとめて意見一覧を作成）（8／15回）
- VI. ファイナルレポート提出（各担当班に発表時の反省と、集計された評価・意見一覧等を元に、発表内容を加筆・修正して最終レポートを完成・提出）

こうしたシラバスに基づき、本演習は以下のような形式で進められる。

- ① 授業のガイダンス時に各々4～5名のグループ（8班程度）に分かれ、最初に各班の扱う諸問題のテーマ（例：環境教育、情報モラル、国際理解、障害理解、性教育、食育、キャリア教育、裁判員制度、言語活動、理数離れ、道德教育、安全教育、小学校英語、等）について各班話し合いにより担当や発表日程を決定。
- ② その後、各テーマについて、班による課題の設定・研究方法に関する話し合い、情報収集／調査・研究／実験・観察／分析と発表資料の作成を行っていく。
- ③ 各班で研究テーマや目的・方法等がまとまったら、担当教員（手嶋：筆者）が班ごとにヒアリングし、必要に応じて指導・助言を行う。
- ④ 研究の進捗状況を報告するために、中間発表として「プレ発表」（各班発表・質疑応答計20分ずつ）を行い、他の受講生の質問や意見を聞きながら、自分たちの研究を修正していく。
- ⑤ プレ発表後に、各班1コマずつの本発表となるが、発表担当班は、必ず発表前（1

週間前～2日前)に担当教員(手嶋)のところに発表用レジュメを持参(又はメールでファイル提出)し、発表計画に関して、事前指導・助言を受ける。

- ⑥ 研究発表および質疑応答・ディスカッション(全8回)…毎回、各班が研究テーマに基づき、授業の前半を使って発表(40～45分)。発表では、通常の研究発表のプレゼン以外に、研究テーマを学校現場に関連させた「模擬授業」の形式を用いてもよい。その場合、指導案の作成時は、自分たちが課題として調べたテーマをどのようにとらえて、実際の指導に結びつけているか、ということが分かるように、「単元設定の理由」や「指導観」、学期あるいは年間の授業の流れも想定した「全体指導計画」等も併せて作成させ、受講者が行う授業の、全体計画における位置づけや意味を明確にする。
- ⑦ 発表した内容は、担当教員および発表班以外の受講者(「フロア」と呼ばれている)により「発表評価用紙」(資料1)に従って評価され(10分程度)、授業の後半(30分程度)はそれらを基に質疑応答やディスカッションを行う。
- ⑧ 発表班は演習終了後、フロアの受講者全員が記入した評価用紙を回収し、教員に渡す。教員は評価用紙の数値評価をまとめて「総合演習評価表」(資料2)を作成し、翌週、発表班に評価用紙とともに渡す。
- ⑨ 質疑応答時には、フロアの受講者の個々の発言回数は「総合演習発言表」(資料3)に“正”の字を書き込んで記録され、発表時以外での授業への取り組みの姿勢を見る。
- ⑩ 全ての発表班は、学期末の指定された日時までに、発表したレジュメをベースにして最終レポートを「最終報告書作成要領」(資料4)に従って作成する。その際、発表評価用紙に書かれた自由記述の意見を、項目番号ごとに箇条書きにまとめ、また、発表班の全員が各自、一連の研究を行ってみて、①難しかったこと、②新たに分かったことを追加・添付し、全部を綴じて教員まで提出する。

続いて、本科目の評価方法であるが、班単位による研究・発表の評価を元にして、出席状況、課題への参加・取り組み、意見交換等といった授業への姿勢・意欲を重視した個人別評価を加味する。評価基準は出席による授業参加(発言・質問回数等を含む)10%、課題設定・調査・発表準備等(取り組む姿勢・態度、協力度、事前相談等)および研究発表(発表方法、レジュメ等の工夫、質疑応答等含む)40%、発表後、修正・加筆を加えた最終レポート提出(各班毎)50%、の各項目について評価した結果を総合判定する。研究発表・レポートの成績の評価基準は、AA)形式に不備がなく研究・発表内容が優れている。A)形式に不備がなく研究・発表が適切である。B)形式は満たしているが、研究・発表内容においてやや不足である。C)研究・発表内容いずれも若干

の難点がある。D)研究・発表の内容において課題がこなせていない、となっている。

すなわち、「総合演習」は、担当教員と参加学生との協働によって運営される性格のものであり、現代の世界や日本の社会に関わるさまざまな課題について広く関心を持ち、自ら課題を設定して調査・研究し、それらを分析・検討してプレゼンテーション等の学習活動を行うことによって、知的好奇心・問題解決能力を高めるために極めて有効な実践的学習の場となりうるものであるといえる。

3. 公開された授業のねらいと内容、参観のポイント



図1：「総合演習」の発表の様子

今回の授業公開は、全15回の13回目、本発表・全8回の第6回目で、家庭専修の学生6名から構成されている班による「食生活の乱れ」とその改善をテーマとした発表を中心としたものである。今回の班の発表は、発表レジュメの枚数A4サイズで22頁（B4片面に2頁ずつ、両面コピーで6枚）におよび、印刷資料以外にも、パワーポイントで食生活に関する小学生と大学生へのアンケート

結果の報告・分析、さらに、文教大学の学食の弁当を実際に食器や皿に盛り分けて、普段の身近な食生活にひそむ栄養バランスの偏りをグラフ化し、その具体的な改善策を述べる、といった興味深い発表であった。（図1）普段、学食で売られている弁当の栄養バランスを目に見えるデータにしてみる、というアイデアは、事前指導における教員と発表班との話し合いの中で出てきたものであり、そうした栄養の偏りを毎回の食事に一品加えることで出来る限り簡単に補うにはどうしたらよいか、という具体的な改善策まで含めた発表に昇華したのは、発表班の工夫の成果であったといえる。その結果、フロアの学生たちによる発表評価の総合点は、全8回の発表の中で最高点である合計44.4点、平均4.0点を記録した（5点満点）。

4. 授業の自評

基本的に「総合演習」の本発表は学生主体で進行されるため、教員の活動は、主に発表前の準備支援等の事前指導として行われる。その後、実際の授業の開始時から発表開始までの進行、発表中の評価用紙への記入、発表終了後フロアが評価用紙に記入

している間（約 10 分）の発表班への事後指導、後半の質疑応答時のフォロー、および、最後のまとめでのクラス全体への話、という、いわゆる「裏方」に徹する形になる。したがって、今回の授業のねらいとしては、発表班が「食生活の乱れ」およびその改善策に関する研究成果として、どのようなプレゼンテーションおよび質疑応答を行うことができ、フロアも適切な質問や意見の交換が行えるか、ということがポイントになるし、一番見て欲しい所もそのようなパフォーマンスが適正に行われているかどうか、という部分であった。

なぜなら、「総合演習」においては、教員は発表班の研究・発表のファシリテーター（水先案内人）であるため、発表班のプレゼンテーションや質疑応答が適正に行われているかどうかは、すなわち、教員の助言・指導という支援活動が適正になされているかどうかの評価の指標となるためである。

そうした意味で言えば、今回の発表の評価が非常に高かったことは、学生たち自身の課題解決力や発表に関わる様々な技術も向上が見られたし、教員側による支援も効果的に行えていたということで、一定の成果をあげることができたと考えられる。

もちろん、毎回必ずしも発表が成功に終わるとは限らず、事前の打ち合わせの段階で発表テーマが絞りきれていない発表班や、プレゼンテーションの仕方がいまひとつで、フロアから「何を研究したのか目的が絞れていない」「ただ資料を読むだけになっていた」等の辛辣な評価を受ける発表班も、過去 6 年、春・秋学期合わせて 15 クラスの 120 組を超える班の中には、少なからず存在している。発表班の研究への取り組み方（姿勢）や、発表時点でのプレゼンテーション力の不足もその原因であるといえるが、それは同時に、教員がそのような班に対して十分な助言・指導が出来ていなかったということの証左でもあり、その都度、反省すべき点であるともいえよう。

過去 5 年間（03－07 年度）の学生による授業アンケート「総合演習」（年度内に 2 ～ 3 コマ担当）の授業評価をみると、「全体として受けて良かった」の評価項目では、年度順に、03 年度…3.7／4.4（以上春学期）／4.6（秋学期）、04 年度…4.9／4.8（以上春学期）／4.7（秋学期）、05 年度…4.3（春学期）／4.7（秋学期）、06 年度…4.6（春学期）／4.9（秋学期）、07 年度…4.5（春学期）／4.3（秋学期）という評価であった（08 年度は秋学期開講のため、09 年 2 月 5 日現在データ集計中）。この数値自体が他の「総合演習」と比べて高いのか低いのかはわからないが、この授業だけで見ると、1 年目（03 年度春学期）の 1 コマを除いて全て 4 点台である。他の項目も殆ど 4 点台のため、これらの数値だけから見ると学生満足度は高いといえるのかもしれないが、項目によっては「講義」と「演習」で質問の仕方を変えないと正確な意識調査にならないようなものもある。

例えば、現行アンケートの Q9「視覚教材（板書を含む）、音声教材等の補助教具の使用が効果的だった」等は、学生が行う発表でのプレゼンテーションのことを指すのか（だとすると班によってさまざまである）、最初の数回で教員が各班のテーマ決定等のための説明に対して用いたことを指すのかが分からないので、こうした項目には教員が補足をしないと、学生は各自のイメージで「学生のプレゼン」に対してか、「教員の説明に」対してかを判断して回答してしまう。そもそも「演習」では、教員が前面に立って知識や技術を伝えていくような「講義」的な場面は少なく、むしろ学生の研究・発表をバックアップしていく立場であるので、どこまでを“授業評価”の対象として見るのか、学生の方からは非常に分かりづらい。こうしたことから、やはり「演習」科目用のアンケートを別途作成する必要があるといえよう。

5. 「総合演習」に関する私見

「総合演習」はいくつかの異なる専修の学生が、グループ同士による発表やディスカッションを通して、受講者の「探究的学力」の向上を目指すことに大きな意義があると思われる。しかし、2006（平成 18）年 7 月の中央教育審議会答申を経て、2008（平成 20）年 11 月 12 日の「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令」公布（平成 21 年 4 月 1 日施行）および「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令及び教員免許法更新制の実施に関わる関係告示等の整備について（通知）」によって、本学でも、新たに 4 年次秋学期に導入が予定されている「教職実践演習」と、早ければ 2010（平成 22）年には差し替えが行われる予定となっている。

同じ演習科目でありながら、現代社会におけるさまざまな課題の研究を通して、学生の「探究的学力」の育成をめざす「総合演習」と、教職に就く直前に、各学生の教員としての責任感や資質をみるという、いわゆる「職能」の最終確認とともとれるテクニカルな側面に主眼が置かれている「教職実践演習」は、その趣旨も目的も異なり、本来代替的に扱われる類のものではない。

今後は、現在（2008 年度）の 1～2 年生が履修している「教育基礎演習Ⅰ」「教育基礎演習Ⅱ」といった科目に、「総合演習」的な要素（専修の枠を超えたグループ研究活動、課題意識に基づく主体的な「探究的学力」の涵養、プレゼンテーション能力の向上、等）を入れていく等の工夫によって、それらの間隙を埋めていくことが求められるであろう。

Ⅱ「教職概論」

1. 授業の概要

科目名：教職概論（秋学期・木曜・5限）

公開日時：2008（平成20）年12月4日（木）

教室：13401

対象学生：文学部（日文・英文）2年生（140名）

2. 本科目のねらいおよびシラバス

「教職概論」は文学部教職科目(中学校・高等学校一種)であり、また、教育学部においても教職の必修科目である。この科目もまた、「総合演習」同様、平成10年の「教育職員免許法の一部を改正する法律」および「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令」の施行に伴い、「教職の意義等に関する科目」として、新たに大学の教職課程に導入された科目である。

本学では、基本的に春学期の必修教職科目である「教育原理」とセットで履修するように設定されており、火曜3限の教育学部1年生対象の「教職概論」のクラスも107名と、いずれも大教室・大人数での講義形式の授業である。ちなみに、この時間（木曜5限）は、春学期の「教育原理」（文学部2年）において、高大連携の一環として、越谷西高校の生徒が1名聴講しており、09年度はこれに加えて、秋学期の「教職概論」でも高校生を聴講生として受け入れることになっている。

本科目では「教職とは何か」という点を中心に進め、教職の意義および教員の役割、教員の職務内容（研修、サービス及び身分保障等を含む）についての認識を深めるとともに、さまざまな課題に直面している学校や教員のあり方について理解を深め、進路選択に資する各種機会の提供等を行う事を通して、「教職」についてより深く考えられるようになることが到達目標である。すなわち、「教職」に就こうと考えている者が、自分自身と深く向き合い、「なぜ自分は教員になりたいのか？」「どのような教員になりたいのか？」「そのためには何が必要とされているのか？」等について、さまざまな角度から考えながら、自分の将来の進路をしっかりと定めることが目指されている。いわゆる「教職に関する基礎知識」を獲得する側面と、受講生自身の「進路決定」の側面を併せ持った科目である。

大人数であるため、教員による講義が中心となるが、必要に応じて資料に関連した文献、記事、VTR等を取り入れ、また、授業の単元の終わり等の節目毎に受講者にミニ・レポートを書かせて学生の理解度を測ったり、講義した内容に関する学生それぞれの意見等のレスポンスを取ったり、といった形を取り入れ、なるべく一方通行にな

らないように工夫をしている。

本科目の授業シラバスは以下のようになっている。

0. 授業ガイダンスー教職の意義と目指す教師像

I. 教員の仕事ー教員の日常と職務内容

II. 教員の身分保証と服務義務

III. 幼児・児童・生徒の発達課題と近年の傾向

IV. 様々な問題行動と対応の原理ーいじめ・不登校・学級崩壊・暴力行為等

V. 学校・家庭・地域社会の役割と連携における教師の役割

VI. 教員に求められる資質能力

VII. 教員のライフステージと研修制度ー生涯学習社会における教師の成長

VIII. 新学習指導要領と「知識基盤社会」に求められる学力

IX. 現代社会における諸課題と教員の役割

X. まとめ・教職に対する適性と進路選択

授業の 評価基準は、出席点（単に出席だけではなく、講義への取り組み方等関心・意欲・態度を含む）30%、期末レポート 70%という得点配分で評価する。期末レポートは、講義で解説した内容や配布した資料に基づき、自分の目指す教師像、教員としての資質の形成、教育課題への対応、進路選択等について、知識・情報の理解力や論理性等を評価している。成績の評価基準は以下の通りである。AA)形式に不備がなく内容が特に優れている。A)形式に不備がなく出題意図に応じた内容である。B)形式は満たしているが、内容がやや不足である。C)形式・内容とも若干の難点がある。D)課題がこなせていない。

3. 公開された授業のねらいと内容、参観のポイント

今回の授業公開は、全 15 回の 13 回目にあたり、「VII. 教員のライフステージに応じた研修制度」に関する講義である。ここでは、前回の「VI. 教員に求められる資質能力」で取り上げた、資質能力を高めるために必要不可欠とされる教員の現職研修が、どのようなシステム・内容において実施されているのかについて、(1) 初任者研修、教職経験者研修、管理職研修、長期社会体験研修等の現職研修の現状、(2) 教員のライフステージと研修の関係、(3) 新しい現職研修体系の事例としての東京都のキャリアアップ研修などを紹介・説明するという内容であった。（「教職概論」資料参照）

今回の講義の内容は、教員としての研修制度に関する基礎知識であるとともに、教員のキャリア形成について受講生に主体的に考えさせるねらいがあり、本科目の期末レポートにおいて、「教員のライフステージに応じた研修制度」について考えてまとめ

させるという課題に関連したものである。

授業の展開としては、前半のさまざまな現職研修の現状については、A4 用紙 10 枚（B4 片面に 2 頁ずつ、両面コピーで 3 枚）に及ぶ資料レジュメに沿って説明を行い、後半の教員のライフステージについては、印刷資料に加え、文部科学省や東京都のホームページを参照して作成したパワーポイントによる図解を用いて説明を加えた（紙数の関係で以上の資料レジュメ等は省略する）。準備されたそれぞれの資料に基づき、教員研修の現状と教員のキャリア形成、ライフステージを学生に主体的に考えさせようとするあたりが参観のポイントである。

4. 授業の自評

今回の授業については、内容が非常に多く多岐にわたっていたため、どうしても教員側からの情報の伝達に終始しがちだったことは否めない。資料は毎回、基礎知識とともに、最新の情報を取り入れるなど充実させるように配慮しているが、その一方で、資料が充実していると、それらをもらただけで受講している学生は半ば安心してしまいう傾向があるので、資料に書かれていない事例なども説明に取り入れて、授業への集中力が途切れないようにした。しかし、後半パワーポイントを用いてより詳しい説明をしたものの、ミニ・レポートを配って、学生に意見や自らの考えを書かせる時間までは取れなかった。

すなわち、今回の授業を単体で見ると、その時間のねらいを十分に達成できていたかどうかを検証することは十分出来なかったといえる。

ただし、先にも述べたように、今回の授業のテーマである教員の研修とライフステージに関する内容は、例年、期末レポートにおいて課題のひとつとして出題しているため、1 月下旬の講義終了後に提出された期末レポートを採点することによって、どの程度学生たちが今回の授業を理解していたかを知ることが可能である。

参考までに、過去 5 年間（03－07 年度）の学生による授業アンケート「教職概論」（木曜 5 限・文学部対象）の授業評価では、「全体として受けて良かった」の評価項目で年度順に 4.5、4.7、4.7、4.8、4.8 という評価であった。

5. 「教職概論」および大人数での講義に関する私見

「教職概論」はいわゆる大人数を対象にした講義形式の授業であるため、さまざまな面での制約がある。

例えば、出欠席の確認ひとつとっても、140 名を超える受講者相手に悠長に出席簿を読み上げて返答させていては、それだけで 10 分以上の時間が掛かってしまう（一

人5秒×140人＝700秒≒12分)。座席指定でもないため、毎回違うところに座る学生140名超を、週1回の顔合わせだけで、顔と名前を一致させることは不可能である。その結果、1年目第3回の講義から、専修別に2つに分けた出席簿のコピーを回す方式に変え、授業の途中で随時ミニ・レポートを課すなどして、出席者の確認に努めている。

また、講義中に指名しても、広い教室では指名された者の声が通りづらいので、ワイヤレスマイクを持って行って回す形になる（ない教室は厳しい）。結果的に、どうしても前の方に座っている受講者とのやりとりが多くなることが多い。

授業環境の面でいうと、教室によっては、スクリーンが窓と反対側にあるため外光で見づらい（カーテンも手動）とか、黒板の前にスクリーンが下りてくるとか（パワーポイントやDVDと板書の併用が困難）、教室の大きさの割に黒板が小さいために後方に座ると見づらい（どこに座るかは個人の自己責任の部分もあるが、必修科目で人数が多いため、やむなく後ろに座らざるを得ない場合もある）などの「使いづらさ」が校舎の新旧に関わらず存在する。このあたりについては、授業担当者に指導上の工夫を求めるのであるならば、教室環境の整備・改善は可及的速やかになされるべきであろう。

Ⅲ まとめにかえて－授業公開のあり方について

今回、初めて授業公開に参加させて戴いたが、やはり期間が1週間だけでは、教員相互の授業を参観したくても物理的には難しかった。空き時間に他の教員の授業を見ようと思っても、実際にはどうしても自分の仕事を入れざるを得ない状況が生じる場合が多い。こうしたことも鑑みて、今後、FDを意識した授業公開や授業評価をより有効なものとするためには、およそ以下のような改善点が挙げられる。本稿のまとめにかえて、これらの項目を覚え書き的に列記しておくことにする。

- ① 相互に参観しやすいように時間割の調整をする。例えば、3人位でグループを作って互いの授業を必ず見て評価するなど、の工夫をする。
- ② 授業公開の期間自体をもっと長くし（最低でも2～3週間程度）、春学期と秋学期それぞれに実施、など、物理的な機会そのものを増やす。
- ③ 録画したビデオをライブラリーにして、時間のあるときに見られるようにすると良い（ビデオの公開には、授業者の了解・学生のプライバシーの考慮が必要であるが）。常葉学園大学（静岡県静岡市）では、各授業を10分にまとめたビ

デオを学内 LAN で流して講義の概要がわかるようにしている。

- ④ むしろ、自分の授業がどう評価されるか、人の授業を以上に、教員が求めているものは、他人の授業で「何かを参考にできるか」（大人数授業での出席の取り方、配布資料、板書、パワーポイント、DVD（VTR）、テキスト等の使い方、ミニ・レポートや授業内課題の活用の仕方、大人数／中人数／小人数の授業での学生とのコンタクトの取り方や受け答え方、等）であり、授業公開のために特別なことをするのではなく、互いの持つ情報や工夫を交換し合える場として行けるとよい。
- ⑤ 授業評価のアンケートで、「演習」「講義」「実験」「実習」を、全て一律で同じ質問項目にするのは無理がある。別々の項目内容を設けての実施が必要である。
- ⑥ 授業で使う教室環境の改善も FD の要素である。
- ⑦ FD は教員や授業だけの問題ではなく、「大学の教育の質をどうするか」ということなので、職員も授業公開や授業研究会に参加できる全学的な体制を早急に整える必要がある。